

年頭所感

1980年代を迎えて



1970年代を貿易の時代と名付けるとするならば、それに続く80年代は技術の時代と言うべきであろうという提案がある。しかし、このノミネーションを受け入れるには、いくつかの前提がある。第1に70年代に貿易が拡大したのは主として西独と日本であって、アメリカは決してそう思っていない。第2に我が国の貿易の拡大は生産技術の拡大によるものであったにも拘わらず、70年代の技術は量的拡大のみに専心し、その技術の根底は大部分輸入技術にあったという反省を意味している。このままでは貿易の時代すら終りかねないという不安がひそんでいる。時代という表現を国際的争奪戦とおきかえてみれば、意味は一層明らかになる。

しかし、この不安こそ実は70年代を象徴する全世界の感情ではあるまいか。西独と日本はその経済的地位を向上させたが、世界的に見れば過去の10年は政治的にも経済的にも、また学術の上からも低迷した時代であり、80年代の初頭を我々は何等展望のないままに迎えたといつてよい。すなわち、政治的凋落はいうまでもなく、ドルの際限なき下落で代表されるアメリカの指導性の動揺から始まっているが、途上国と呼ばれる一群の新興国家が奇しくも西欧的科学文明の、別けて第2次大戦後の繁栄を支えた石油産出国の主要を制するに至って、将来の発展の主導権さえもこれら途上国家群、なかんづくイスラム国家群に委ねかねない情勢

になって混迷の色彩を特に深くしている。なぜならば近代科学主義の発展の中で見落しがちであった風土や民族の意志に思いも及ばなかった次元で直面しなければならなかったからである。これによって、世界は70年代以前からの課題であった南北の経済格差、東西の政治思想の対立、すなわち南北問題、東西問題が未解決のままに深刻な第3の問題をかかえこんだことになる。南北問題は従来、南の貧窮を如何にして援助するかという人道主義的建前に立って、西と東との援助方式、援助目的の差から生ずる所謂「本音」を外交の円卓に共に座れる限界に抑え合うというパターンが定着して来た。すなわち、南北問題の建前だけで割り切れぬむずかしさは、それに東西が絡むからであった。しかし、こんな従来の発想の基盤とは一体なんであったろう。東といい、西といいその発想は西欧的なものであって、自由主義であろうと全体主義であろうと、それは西欧的理解の範囲にあった。しかし、その理解を超えた不可思議な東洋が中国において、無気味なモスLEMがイランにおいて新たな胎動を開始しはじめたのである。

まず、中国は従来その政治行動を「又専又紅」といわれて来た。すなわち、ある時は中国共産党の政治綱領が強く押し出され、ある時は実務家を中心とした技術主義が支配する。現在華鄧政権は技術主義を前面に出した時代にあり、それは最近の人民日報の伝えるごとく、「もし国民経済が向上せず、基本的生活条件を保証することが出来ないならば、遅かれ早かれ何時の

日か中国は大混乱に陥るであろう。——という内圧によるものであるとしても、それだけが急に中国を自由国家群に近づけつつあるのであろうか。確かに過去に於て1949年の建国以来、大躍進、文化大革命の大きな歴史の渦を介して、59年劉少奇の台頭と失脚、69年林彪の栄光と死は時の流れを蛇行して「又紅又專」の姿を軌跡に画いた。しかし、70年代からニクソン、キッシンジャーの訪れに触発された政治行動は、毛沢東の死、4人組追放によって俄に顕在化したとはいえ、過去のパターンとは全く異なるものを示している。すなわち、中国の中の政治情勢の熟成は、一方において人民日報が伝えるような事情があるとしても世界に向けて門戸を開く時節を迎えたといつてよいであろう。そしてそれは、毛沢東という強い個性が行った巨大な精神運動が、もはや「又紅又專」の強制を必要とせぬ段階、言葉を変えれば「亦紅亦專」の段階に達したといつてよいであろう。「亦」とはもとより共存をあらわす。西欧的立場から見た時の東洋の驚くべき受容性と難溶性はこの混沌たる「亦」にあるのではないかと思う。「亦」によって、如何なる尖鋭な西欧的論理も遂には風土の中に同化されて行くが、それは決して混乱でない。

サウジアラビア、ホメイニ師のイランが代表するかに見えるイスラムの所謂アラブの大義が、その中にもつ多くの可能性を中国に似た足どり、一步一步、歴史の当面に姿をあらわして来るのかどうかは、私の知識では何とも判断のしようがない。しかし、サウジアラビアが常にOPECの石油値上げの抑止力になっているのを、「アラブの大義は広く神からの恵みを世界同胞に開くものである」という立場から理解しようとも、またイランの対米強硬策を「沙漠の民に還る決意」を秘めているものであると驚くとも、それを単に前者はソニ派であり、後者はシーヤ派であると割り切ることは出来ないし、また割り切ったとしてもそこから何等の解答は出て来ない。西欧科学主義はただ戸惑うばかりである。

ところで、西欧にとって日本とは何であろうか。日本人の意識の中で自らを先進国として位置づける時、同時に西欧文明に最も近いもの、あるいは西欧を吸収し切って西欧そのものであるという考えがあるかも知れない。しかし、戦後の日本は生きるための「手段」の追求に全精力を傾けたといつてよい。終戦直後の状況は精神的にも物質的にも、事実それ以外の生き方はなかった。唯一の武器は勤勉さと、戦前からの教育の蓄積とであった。しかもそこに立ち現われた西欧は多くの文明の中でも、最も客観的に自明な「科としての学」を確立した文明である。すなわち、「科としての学」とは、その文明の全体系の中であって、分離しても、それ自身独立して存在出来る要素から構成されたものであって、それ故に異文化に対しても強い浸透力を持ち得るものである。特に自然科学は最も効用性あ

る科学として、日本にとって最も歓迎すべきものであった。しかし、現在、それを手渡した西欧も、それを受け取った日本も、実は授受しあつたものは「手段」であつて「本質」でなかつたということを見逃しがちである。しかし、文化と文化とは互いの本質の差を本能的に感じ合う。科学の交流を通じて猶残る異和感はかくのごとくして、西欧的世界から日本を見る時、依然として理解を越えたものとして残るであろう。

このように考えて来ると、80年代はまさにこれまで世界を支配した西欧に対して、過去の中から伏流のごとく流れ出て来た別のカテゴリーの二つの文明である東洋とイスラムが登場して来たということになる。スベングラーの予測のように、西欧が急速な没落をつけるとは思われぬ。歴史を辿つても、西欧文明の復元力には驚くべきものがある。すなわち、ヘレニズムとヘブライ主義の二つの潮流が交差し交流し何度かその危機を乗り越えた。しかもローマは常にこの中にあって賢者の役割をした。この明晰な論理を欠いたら暗い中世期からルネッサンスを花咲かせることは出来なかつたであろう。そして、「科としての学」である科学はこの間であつて、古代インドからエジプトからも「言葉」を集めて、既述したように、この文明の最も大きな特徴である「共通の言葉」を創つていった。そして、当然のことながら、真先きに西欧に大きな利益を与えた。大航海の時代からはじまる鬱勃たる願望を世界致るところの植民地に拡大して行つた頃、この文明は最も活力があつた。20世紀に入って、その熟成の度は深まったが、波が打ち返すように次々と植民地を失つて行つた。この限りにおいてスベングラーの危機感^{ウツボツ}は肯定される。しかし、植民地からの撤退はこの文明の真の衰退とはつながらぬ。むしろ世界史的立場からは、この文明は過去のあらゆる文明がその植民地になしたよりも豊饒な種を世界中に撒き散らす役割をその植民地の占有を通じて行つたといえよう。問題はかくのごとく撒かれた種を、それぞれの風土と民族が如何にそれ自身の文明の中に消化し定着化させて行くかということである。——換言すれば、「科としての学」を表現する「共通の言葉」は汎世界的であり、あまりにも浸透性の大きなものであるが故に、それぞれの文明がその受容力を越えて受容した時に起るそれ自身の文明の破壊と、更にそれがその母体である西欧をも超えて、いわば超文明的であるが故に、それに矛盾的に立ち向かう、いかなる文明の対立考も持たないという宿命である。すなわち敷衍するならば、前者の例として、たとえば日本がたとえ「手段」としてさえも、この効用性に富む「共通の言葉」をその受容力を越えて受け入れるならば、その手段は日本文明固有の存在の根柢をも浸犯して行くであろう。ただそこに残るものは、日本においてもその兆の見え始めている肥大化だけであろう。また、後者の例として、もしその宿命が真実で

あるとするならば、あたかもインカやアステカのジャングルと岩の文明が、それ自身の閉じられた世界の中で亡んで行ったように、世界は地球という閉じられた空間の中で、唯一の強力な文明の支配がその絶頂に達した時から、規模の大小はあれインカやアステカの宿命を辿るであろう。これは文明の交替を予想するスペングラーを越えてノストラダムスのできえある。

不安の正体は実はかくのごときものである。多くの人々が、しかも知識人と称せられる人々が、地球が俄に狭くなったと感じ出してからもかなりの時間が経つ。その時間の経過の中で人々は省資源、省エネルギーを学び始めた。しかし、いずれにせよ、それらは消極的発想に過ぎない。インカやアステカの宿命を僅かに延期するだけである。しかも地球全体の運命を待つまでもなく、小地球であり小文明である人間それ自身にとって、その属性の一つに過ぎない「科としての学」が肥大して、他の多くの可能性ある属性を圧倒してしまう時、肉体的にも精神的にも個としての、個であるための適応を失って行く。そして、「科としての学」それ自体においても、発展の段階ごとに更に「科としての分科」を遂げて行くという「科の宿命」の故に所謂多様化という核分裂が繰り返される。既に学問の世界において最も「共通なるべき言葉」が共通性を失おうとする自己矛盾的接着が目立ち始めているのはそのためである。

ここにおいて今、世界が最も必要としていることは「科としての学」にそれ自身の位置を自覚させることである。明確にいうなら手段が目的以上の位置を占めてはならない。しかし、それを胎生した西欧がそれ自身の手で、それを成し得るであろうか。西欧を幾度となく甦らせたヘレニズムとヘブライ主義が再び混沌から立ち上がるためには、その復元力を東洋やイスラムとの激しい接触に求めなくてはならないかも知れない。そして、その時、日本は一体どのような役割を果たして行くのであろうか。終戦以来、生活の手段として「科としての学」を追求しすぎた日本は、残念ながらこのままでは、生き残ったとしても「西洋の没落」の最後の幕引きの役しかない。しかもアメリカはその失った威信の復活を賭けて、再び「科としての学」の中の技術の新たな開発を再開しようとしている。79年の初冬、10月30日、カーター大統領が議会に送付した「産業技術革新政策に関する教書」がそれである。ここには中小企業内のイノベーションを刺激し育成する具体的方針から特許法の改定、特許税制に対する改革まで広汎な領域が盛り込まれ、しかも明らかに技術モンロー主義的色彩が強い。科学技術情報を外に求めて量的拡大のみに没頭して来た日本にとっては、このアメリカの動向は、頭を高々と揚げて世界文明の行く末を望み、その活力の復元に関与するどころか、当面の手段を奪われた狼狽に益々自己を見失っていく確率が高い。当

然、日本は日本としての当面の対応に着手しなくてはならないだろう。しかし、その時の私の願いは、広い展望と遠い視点に立って、日本が「手段」を追求するあまりに失い続けて来た日本それ自身の文化を汎世界の中で甦らすことにある。これは過去の島国に閉じられた狭い国粹主義に戻ることでない。これももはや閉ざされた道である。日本の文化的存在が世界の文明の復元力に関与する最も確かなあり方としての自らの文化の個性を深めて行くことでなくてはならない。

学位（博士）授与者

昭和53年4月1日から昭和54年3月31日までの間に、本学で学位（博士）を授与された者は174名（理学博士42名、工学博士132名）であった。大学院博士課程修了による者 95名（理学博士25名、工学博士70名）論文提出による者 79名（理学博士17名、工学博士62名）であるが今回は昭和53年6月30日から昭和54年3月26日付けで授与された者の中から課程博士についてのみ掲載することにした。

授与者氏名、学位番号、学位論文は次のとおりである。

課程修了によるもの

昭和53年6月30日付授与者

理学博士

久保田 實：理博第322号

Syntheses and Properties of Copper (I)
Complexes Having Triphenylphosphine
Ligands

工学博士

権 哲信：工博第704号

発展途上国における科学技術発展パターン
の構造分析に関する研究

松本壽夫：工博第705号

メタノールのカルボニル化反応における
CO-, Rh-, およびIr-錯体触媒の研究

丸山一典：工博第706号

フェニル遷移金属錯体の合成と性質

提 正臣：工博第707号

工作機械のボルト結合部動特性に関する研究
金 海珍：工博第708号
水素結合型ポリマーコンプレックスに関する研究

昭和53年9月30日付授与者

工学博士

ルー・ハン：工博第709号

Piezoelectric Properties of the
Perovskite - Type Ceramic Compounds

昭和53年10月31日付授与者

工学博士

北川 能：工博第710号

油パイプラインにおける非定常流れに関する研究

昭和53年12月31日付授与者

工学博士

鈴木 暁男：工博第711号

耐熱合金の拡散接合に関する研究

昭和54年2月28日付授与者

理学博士

山口 俊久：理博第323号

強誘電体 $\text{AgNa}(\text{NO}_2)_2$ と NaNO_2 の圧電気と電歪の研究

昭和54年3月26日付授与者

理学博士

志賀 博雄：理博第324号

Rational Homotopy Types and Self Maps

長谷川 拓一：理博第325号

Spectral Geometry of Closed Minimal Submanifolds in a Space Form Real or Complex

山田 陽：理博第326号

Precise Variational Formulas for Abelian Differentials

(以下次号)

昭和55年度 工学部附属工業高等学校 専攻科(夜間)生徒募集について

1 募集人員 (第一学年 男・女)

機械科 約25名 建築科 約25名

電気科 約25名 工業化学科 約25名

2 出願資格

高等学校卒業者(昭和55年3月卒業見込みの者を含む)又は、法令の定めるところにより、これと同等以上の学力があると認められた者

3 受付日時・場所

昭和55年3月10日(月)～3月12日(水)

午後5時～7時30分

本校

4 入学者選考

(イ) 方法 出願書類及び面接試験

(ロ) 期日 昭和55年3月17日(月)・3月

18日(火)・3月19日(水)のうち1日

で、このことについては出願受付の際指定する

なお、詳細については、同校教務掛(内線27)に問い合わせして下さい。

編集後記

新年明けまして、おめでとうございます。今年も誌面の充実に努力してまいります。一層の御支援を賜わりますよう、よろしくお願い致します。

東京工大クロニクル No.120

昭和55年1月12日

東京工業大学広報委員会 発行©

東京都目黒区大岡山2-12-1

Tel. (726) 1111 内線 2032
